
たゆとう

そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たゆとう

【Nコード】

N4954U

【作者名】

そら

【あらすじ】

旧宮家の血をひく少女の男前な生き方。

超シスコン兄も交えて、お気楽に生きたいはずが、ずれている気が。。。

腹黒兄と妹が動くときは、ただじゃすまない。

見つめる先（前書き）

携帯で書けるかチャレンジ。

四つ目のかきはじめちゃって、無謀ですね。

見つめる先

いつもの稽古の帰り、めったに鳴らない携帯が車に響く。

運転手の吉住さんは、こちらを見る事はないが、意識を私に向けている事がわかる。

携帯の着信を見ると、二つ違いの兄からだった。

珍しい、あの兄から。

最近会ったのは、何ヶ月前か？私はゆっくりと、その電話に出た。

電話に出た私は、思わず笑顔になった。

何とも面白い事になっている。

私たち兄妹は兄が九つ、わたしが七つの時に、母方の祖父母の元に引き取られた。

父と母はお互いの家に反対され、駆け落ち同然で一緒になった。

売れない写真家の父と旧宮家の血を引く一人娘の母。

慎ましい暮らしではあったが、温かなそれは幸福と呼べるものだったのだと今ならわかる。

父があの日、南アルプスの写真をとりに出かけるまでは。

父は山にかかる月の写真をライフワークにしていた。

そしてその父は私が五歳の時に南アルプスに向かい、そのまま遭難死した。

いまだ行方不明の父はそのカメラに、ちゃんと望んだ月を写せたのだろうか。

暗い空と深山や渓谷、そこにかかる幻想的な月。

わずかばかりに残るそれらの写真は母の手で大切にしまわれている。

私はまだ見ぬ父の最後のそれらの写真を思い浮かべ、うつとりと目を閉じた。

母はその後一年、帰らぬ父の生還を信じて、父の代わりに今まで以上一生懸命働いてくれたが、体を壊してしまい、結局、私達を施設に入れるくらいならと、飛びだした実家に頭を下げた。

今も私達兄妹を初めて見た時の、あの祖母の視線を思い出す。

まるで汚いものを見るかのような忌々しげな視線だった。

聡い子供だった私は、初めて人から向けられるその視線にひどく傷ついたのを覚えている。

それが私の幸福な子供時代の終わりだった。

旧家の一人娘で婿をとった祖母にとって、そのよりどころとするその血の、そこに入り込んだ父親の血は穢れでしかなく、とうてい許せるものではなかったらしい。

初対面の唯一の孫たちに向けるまなざしは、その血の穢れを押し量ろうとする冷えたものだった。

まっすぐに男らしい兄は、絵にかいたように悉く祖母と衝突し、小学6年生の頃には夜の街を疾走するようになり、自然強さを身に着け、元々あったのだろうカリスマ性に磨きをかけた。

やがて同じ年くらいの子供が兄の元に集まりだし、その数が徐々に増えて、今じゃ名前の売れた、このあたり一番のチームに成り上がっている。

兄は中学生の時分から現在までその総長をゆるぎなくつとめている。

もちろん祖母のいるこの家などめったに帰ってきやしない。

これが兄なりの自己証明なのだろう。

兄のとつた道は自分が自分らしく、おのが力のみで生きるという事。

そして、自分でも子供らしくないと自負する私は、反対に淑女らしい淑女になって、祖母を見返す為に、日夜、血をはくような努力をしてきた。

あれから十年、私は見た目、所作、どれをとっても一流の淑女だと

自惚れでも何でもなく、自他とも認める娘になれたと思う。

祖母の家に引き取られた時から毎日、毎日嫌み混じりの小言にさらされてきたが、最近では、やっとそれもなくなりつつあるのがその証明でもある。

あの日々を思い出す。

小学校の帰り、まず家に戻ると、御霊にお参りし、すぐ祖母の待つ茶室に向かう。

そこで、祖父母に帰還の挨拶をする。

祖母は必ずここで嫌と言うほど、私をあげつらう。

顔に品性がない、所作に優雅さのかけらもない、誰に似たやら嘆かわしい、本当に毎日毎日よく飽きないほどに、言われ続けた。

私は表情に何一つ出さず、頭を畳につけるほど礼をとり、神妙にそれを聞くのが日課だった。

しかし祖母の繰り言に反比例するように、私の私である事のプライドは堅固なものになっていった。

母の入院先の豪華な個室を思い浮かべ、兄の自由さを誇りに思い、きちんと毎回祖母の嫌味を聞きながら日々の稽古ごとに励んだ。

兄とは別の方向で私はちゃんと祖母と闘っていた。

私達は、まめに連絡はとりあわないけれど、仲がよい兄妹だ。

ただし私に会う度、バケネコ呼ばわりするのは、いただけない。

それについてはきちんと一度話し合わねばならぬ、とは思ってはいる。

そのあまりかけて来ぬ兄からの電話は、兄ではない人の声がした。

「やあ、大事な兄さんは預かってるよ、一人でおいでよ。兄さんを返すからさ。」

「篠宮桜さん、だよね。是非ともこの鬼が溺愛する妹に一度会ってみたいんだ。」

その言葉を聞いて、私は車中でニツコリ笑った訳だ。

珍しく兄がドジを踏んだらしいのがおかしくて。

第2話 笑える話し

私は御稽古事の帰りなので、綺麗な若草色の着物に黒の地の帯姿だった。

運転手である吉住さんは、未だ入退院をする母を思い続ける純な人で、幼い時から祖母にねちねちやられていた私のシンパでもある。

私の気配を全身で伺う吉住さんは、私の指示を今か今かと待っている。

私はその期待に応えるべく、電話で指示された住所に向かうようにした。

途中、祖母に電話をかける吉住さんの声があった。

「お嬢様は稽古の居残りをするよう師範から、お声がかかりましたよう。はい、飛んでもございませぬ。何か粗相があつてとかいうものではなくて、興ののられた師範直々のお声掛りのよう。はい、終わり次第に。」

そう電話のやりとりが聞こえる。

可哀そうなおばあ様。

今や屋敷中、おばあ様付きの人間以外、皆私の味方よ。

それにしても、いつも油断するなど言っているのに、うちの兄はどちらかというと一度懐に入れてしまえば甘い所がある。

私かもし兄のチームを潰そうと思えば、何度でも潰せたくらいには、
だ。

兄は大物なのか、ただの間抜けなのか、かの織田信長も真つ青なん
じゃなかるうか。

吉住さんが、もう少しでそのクラブにつくと声をかけてきた。

さてさて、しょうがない兄を持った妹の宿命とあきらめよう。

そう言えば、お気に入りのデザイナーの新しいワンピースがもうじ
き発売になる。

それで手を打つと、私はそのクラブのドアを黒服の従業員に開け
てもらいながら思った。

第3話 バカばっか

私が店内に一步入ると、あからさまではないが、注視されているのがひしひしと感じられた。

中にいる男の殆どは、むき出しの腕に同じマークを入れたタトゥにゴシック文字が入っているし、女はそれ下着？って感じの恰好ばかりの連中。

そこに紹の合わせの着物姿の私が入っていけば、目立つ、確かに。

けれどね、はつきりいって、この連中ダメダメだわ。

ここって電話をかけてきた男のホームなわけでしょう？

ちらっとみた限りじゃ、一人二人がぴりっとした空気を持っているだけで、あとはだらしない人間ばかり。

恰好が、ではなく気配そのものがゆるみきっている。

なんて事、こんな場所と人間が集まるところのグループに兄が囚われているというの？

……やっつてられないわ。

私は興が一気に冷めるのに伴い、そのままきびすを返し帰ろうとした。

そこに声がかかった。

「お嬢サマ、お兄ちゃんはいいの？」

振り向くと、数少ないぴりっとした空気を持つまだ二十歳にはなっていないだろう大柄の男が私に声をかけてきた。

「わたくし、間違えたようです。兄がいると聞いたものですから、お邪魔させて頂こうと思いましたが、本当にお店を間違えてしまつて。お邪魔して申し訳ございませんでした。」

私は軽く首をかしげ不思議そうに男に答えた。

「間違っちゃいねえよ。篠宮桜さん、俺が電話したんだから。」

「まあ、お電話いただいた方ですか？」

私は店内をきよきよ眺めて、もう一度男を見た。

「でも、残念ですけど、ここに兄はおりませんでしょうか？兄を捕えるには……ここは役不足ですよ。」

「ごめんなさい、言わせていただければ、レベルが違いすぎますわ。」

「では、ごきげんよう。もうお会いすることはありませんでしょうか。」

そうやって私が店内を再び出ようとするのを、丁寧ではあるが、バカにしたのをやっと気づいた一人が、大声を上げる。

「てめえ、何ふかしてんだあ！こら！」

私はまるでその乱暴な言葉に驚いたかのように、目をぱちぱちさせる。

そして、その男の腕にもたれかかっている女がそれはそれは、憎々しげに私をにらみつけているのを見た。

ん？

コテンと首をかしげてそちらを見れば、その女が大声をあげた。

「ねえ、そのいけすかない女、早く何とかしてよ！」

「ハイジさんの妹だからって、生意気よ！」

あらら、兄のニックネームを知ってるってことは、兄が食い散らかした女その1ってどこ？

私はにつこり笑って、その場の空気など柳に風、って感じで流して、その女に声をかけた。

「お会いしたことございますかしら？兄の知り合いの方は大体紹介されていますけど・・・、あいにく貴女は存じ上げませんわ。」

「兄に親しい方で、わたくしを、お・ん・な・呼ばわりする方はおりませんもの、愚問でしたわね。」

私は飛び切りの笑顔で答えた。

それに、クツクと低い声が笑うのが聞こえた。

見るとカウンターの奥からだ。

「マスター！」

幾つもの声が咎めるように声を出す。

「お前ら、大丈夫か？噂は知ってたんだろ。」

「その女ががめた携帯で、オイタをするのはいいが、本当に知ってやってんだな！」

私はそのマスターと呼ばれた男を見た。

30は過ぎているだろうが、そのがっしりとした体に隙はなく、その目は大人の、本当の大人の男の目をしていた。

どうやら店と、ここにいる人間とは、同じ穴のムジナではないらしい。

「まあ、貸切のお客様にいらぬおせっかいかもしれねーが、な。」

その言葉と共に、入り口のドアから、顔中から血をしたたらせたドアボーイが店内に放り出されてきた。

もちろん、私はすぐさまパツと逃げ、自分の高価な絹の着物を守ったのはいつまでもない。

もう一人のドアボーイの襟首をつかんで店内に入ってきたのは、私

の兄だった。

第4話 兄登場

血だらけの人間をほおつた兄は、店内を見渡して、私の姿を認めると、それはそれは甘い笑顔になった。

兄の登場に、兄の放つ半端ないカリスマ性にその場は呑みこまれていた。

そして続いてドヤドヤと入ってきた兄の所の人間との一目見て違うオーラにびびる間もなく、あっという間に店内は制圧された。

男も女も関係なく、そこかしこでうめいている人間の中、私はつかつかとあの女の前にいって、

「この人、ハイジって言うてたよ。知り合い？」

そう兄に聞いた。

兄はつかつかと歩み寄ってきて、その女の倒れている所にくると、その髪をつかんで顔をあげさせた。

「オイタの犯人はお前か？」

そう言うて微笑んだ。

女はすがりつくように、兄をみて何かを言おうとしたが、兄は笑顔のままに、髪を鷲づかんだ手を離さず、その顔を膝で綺麗に蹴りあげた。

何かの鈍い音と共に大量の血がまき散らされた。

私は兄に着物に血がかかったらどうしてくれようと文句を言おうとしたが、店内に入っただけで周防君が私にピタリと寄り添って来ていたので、私をかばった周防君のシャツが血で汚れただけだった。

で、口をとがらせてはみたものの、兄に文句を言うのはやめて、周防君にありがとう、とお礼をいった。

周防君は副長という立場だけど、私たちにとって幼馴染でもある気心の知れた人間の一人。

兄は器用に血をさけていた、残念、かかれればいいのに、そう思った私に考えていることなどお見通しだろう兄は再び私を見た。

「で？何でうちのお姫様が稽古の帰りにこんなところにいる？」

ねえ、目が笑ってないですけど。

元はといえば、兄のせい、私はギャラリーの手前、急いで10匹ほど更に猫をかぶり、得意の、うん、バカな男ほどきくよ、この必殺ポーズ。

コテンと小さく首をかしげ、

「あら、わたくしの方が知りたいですわ。お兄様の携帯からわたくしの所に電話がかかってきて、お兄様をあずかっている、っていいんですもの。」

「わたくし、お兄様が大変だわって、あわててきたんですのよ。」

「そうしたら、おつむの弱そうな方たちばかりで、ここにはいないわねって思いましたの、ですから、おいとましようとしたら、先ほどの女の方が、わたくしにハイジの妹だからって、と、何故かお怒りになって……。」

「わけがわかりませんわ。お兄様の愛称をなぜこの方がご存じなのか、わたくしもお聞きしたいくらいですけど。」

私は顔面がぐしゃぐしゃに潰れ、歯も折れたらしい女の方をチラッとみて、

「お聞きするのは難しそうですね。」

「あつ、でもその方、親しそうにしてらした男の方がいらしたわ。お兄様お聞きして下さいませんか？」

私がそう言うと、兄がどいつだ、と目で問うて来たので、私は、あの方よ、とカウンターの椅子の横に足を投げ出してうめいている男を指し示した。

「桜、人を指さすなんて、はしたないぞ。」

「ええ、お兄様気を付けますわ。」

そう会話しながら、まだ少しばかり元気が残っている店内の人間は、顔を青ざめさせながら兄が向かう先を見る。

そこで兄は質問という拷問をやったのけ、その腕の向きも足の向きも逆になり泡を吹いて失神した男から、あの女から携帯を渡されそ

そのかされたと白状した。

その男に兄が質問している間、数少ない覇気を持った男の一人がヨロヨロになりながらも、その男を助けに向かおうとしたが、たどり着く前にぼこぼこにされていた。

どうやらこの男がこのグループのリーダーらしい。

そして兄に質問と言う名の拷問を受けている男の身内みたいだ。

遊びに乗ったあなたが悪いわ。

良くいるのよね、自分の身の程を勘違いする人間が。

兄の所は好戦的ではないし、皆遊んではかりにみえるチャラ男ばかりだけど、小学生の時分からストリートで生きてきたのよ。

私は倒れても必死に助けに向かおうとする男の傍にいき、そっとその唇から流れる血をそっとふいてやった。

絶望と怒りに昏く沈むその眼差しと視線をあわせ、

「弱い、それって罪よ。」

そう言って男のその目に自分の指を近づけた。

男がわからぬままに、爪でひっかいてやるうとしたら、ピンとはじかれた。

コンタクトだ、それもハードタイプ。

「残念。」

私が言うと男は見知らぬ生き物を見るように私を見る。

私が何をしようとしたのか、今さらわかって驚愕している。

「私、お兄様と違って血は苦手なの。ケチね、片目くらいなくてもなんとかなるでしょうに。」

「もういいわ。厭きたもの。帰らなきゃ。あなたもつと強くなって下さらない？つまらなすぎたわ。」

私は知らんふりしてカウンターのにいるマスターに、顔をむけた。

マスターは何も変わった様子もなく、あいかわらずいた。

その彼に会釈をして、私はもう帰るべく、今度こそ本当にきびすを返した。

第5話 似たもの兄妹

今、私は帰りの車の中にいる。

運転手の吉住さんは、本当に面白い。

ツーといえばカー、その上、荒事を幼い兄に教えた腕もある。

「ねえ、すごいタイミングでお兄様いらっしやっただわね。」

私がミラー越しに吉住さんをみながら話しかける。

「はい、ようございませう。早すぎず、遅すぎず、さすが薫様です。」

そうやって運転をしながら吉住さんから返事がくる。

「で、いつ連絡を？」

私が聞くと、

「はい、桜様に薫様からだという電話が入りました時に、確認をとらせていただきました。」

そう、と私がつばやいた時、

「あゝ、もうめんどくせー！俺に聞け！俺に！」

そうやって髪を一度手でかきあげる兄に私は冷たい目を向けニッコ

り笑う。

「ふっ、お兄様、見知らぬ下品な女が、お兄様の子だと言って赤ちゃんを屋敷に連れてきたのは、去年の春でしたわよねえ。」

「あの祖母が卒倒したので、私的には、最高でしたけど、あの時はすぐにお兄様とは無関係とわかって場はおさまりました、けど・・・」

私は胸のたも時から、扇子をだして、ぐりぐりと兄のこめかみをえぐってやった。

兄は背が高いから。

そして伸びをして、まじかに顔を寄せた。

「よく聞け！このバカ兄貴！てめえの股間についてるものの制御もできねえで、このワタシに迷惑かけんな！ナンだ！あの女、本当に趣味わりい！同じ女とは2度寝ないだあ！自分のあつちのテクニクに自信がねえんだろぅがよお！だがな、そんなのかまやしねえ！面倒そうな女はきちっと潰しときやがれ！お前のとこでな！こつちにもってくんない！まして、久々に骨のあるやつかと思えば、雑魚だ！雑魚！思いつきりなあ！せっかくでしゃばってきたんだ、少しは楽しませろってんだよ！」

低く恫喝した後、冷たく笑う。

「お兄様仕様の言葉でしたら、そのタリナイおつむでもご理解いただけますでしょうか？わかっていただけただけかしら？」

それに、兄はクツクツと笑いながら、長身の体をかがめながら、自分から私に顔を寄せてきた、くつつくほどに。

「怒んな、怒んな！俺が悪かった。丹念に作り上げた化けの皮はがれるぞ。お前のカワイイ素は俺だけが知ってればいい。いつも言ってるんだろ？俺以外に見せたら・・・わかってんだろ？約束する、これからは処理道具は使ったらきちんと壊す事にする。絶対だ。」

私の扇子をひよいと取り上げ、片手で私を更に抱き寄せ、もう片手は降参のポーズ。

ふん、八つ当たりくらいさせて欲しいものだわ。

この兄が情けなく囚われているなんて、何て面白いと思ったのに、これだもの。

私はため息を一つついて、手をしっしっとな振って兄を押しやる。

「あのババア、どうだ？」

「相変わらずですわ。」

お互い窓の外をみながら、それでお互いわかる。

「久しぶりのお兄様のお帰り、喜んでくださるといいんですけど。」

私が言うと、兄は、

「まかせろ！血管の何本か確実に切らせてやる。うまくいけば、あの世にいけるくらいにな。」

と、うつそりと笑う。

「まあ。」

私は驚いたように口にたもとをあてて兄を見る。

兄もまた私を見る。

2人でひっそりと笑いあった。

「桜、あの言葉使いは少し下品すぎるほどに使わないとだめだ。迫力に欠ける。どうしても桜の品の良さが隠してもにじみでてしまっ
な。」

「今度、大きい出入りでもするか？ある程度のチーム同士のそれは、
本当に下品だぞ。良い教材になる。」

「まあ、お兄様、喜んで見学させていただきますわ。」

私達は間違いなく仲の良い兄妹だ、と思う、似たもの同志の。

第6話 相変わらずの人

私と兄はあれから祖母の屋敷に戻って、軽い夕食を取ってから、それぞれの部屋で早めに就寝した。

そして今この広い和室でそれぞれ朝食の膳を静かに囲んで待っている。

祖父母がようやくお成りだ。

すすつと下がり、朝の挨拶をする。

畳に向ける手の角度、体の傾け方、伊達にこの10年やってきたわけじゃない、そして、自分の脇にチラツと目を向け兄の様子を確認する。

ため息の出るような所作で、兄もまた挨拶のため頭を下げていた。

こういつ時ずるい、って思う。

殆どこ屋敷になどいないのに、祖母でさえ横やりをいれることなどできぬ所作を簡単にやりとげる。

何だろう、野生のカンか？カンなのか？ほら、そして……。

見事に祖母の目がつりあがる言葉を開口一番だ。

朝から面倒な！

「おじいさま、おばあさまには、つつがなき様子、安心いたしました。」

祖母はこの屋敷の主だ、いついかなる時も挨拶は必ず最初に受ける。

それを、兄はわざと無視する。

祖父も自分が先に呼ばれたのを困ったようにしている。

祖父は気の優しい人で、祖母には絶対逆らわない分毛筋の家の人間だ。

自分を持たぬ愚かな人間だ、ともいえる。

幼い私達への祖母の仕打ちを見て見ぬふりした、ヤサシイ人間だ。

行儀見習いという長時間の正座や、食事の箸の使い方ができぬなら、と犬のように口で食べさせられていた時も、そつと祖母のいない時を見計らい、私達兄妹の元にやってきては、「可哀そうに。」と云つて頭をそつと撫でていく。

その手は頭を撫でていくけれど、決して救いはしない手だった。

どちらもどちらだ、いい夫婦だ。

「ほんに、お里が知れるというもの。薫、お前には困ったものです。家にも寄り付かず、次期当主はもはやあきらめてはいますが、挨拶一つ、未だ覚えられぬ。この家に足を踏み入れるならば、その下賤の気配は落としてきなさい。何度言えばわかるのやら。」

そう言っつて兄をきつく見る祖母。

兄はけろりと、

「私の挨拶に不備がありましたか？おかしいなあ、ごく普通のご挨拶をしただけです。受ける側に問題があると、普通も普通じゃなくなるのですね。ようくわかりました。人間の卑屈さは深いのですね。お教えいただきありがとうございます。」

祖母が何か言う前に、面倒になった私がすかさず挨拶をする。

「おばあさま、おじいさま、おはようございます。お兄様は寝不足のご様子、おかまいなさらずに。せつかくの朝餉が冷めてしまいますわ。」

私はこのおかゆの朝食が大好き。

邪魔されてなるものですか。

無邪気そうに声をかけると、傍に控える使用人の手前、祖母は鷹揚にうなづく。

何気に兄を見て、食べさせる！と目で脅す。

おかゆの朝食は週に二回、これって大事よね。

何とか朝食の席は落ち着きつつある。

私は大好きなおかゆに、いりごまをふりかけて梅をいれて、和食用のスプーンで味わっていた。

うん、この絶妙なおかゆの柔らかさに、香り、幸せ。

私が一匙ごと至福の時間を味わっているのに対して、祖父は目に見えておろおろしているし、祖母は吸い物に軽く手をつけているだけ。

兄に至ってはすでに食べ終わりつつある。

いつにもまして白けた食事の席だが、かまうものか、私はだしまき卵に手を伸ばした。

「まったく誰に似たのか、我が娘ながら、どういう教育をしたのかしらねえ。もう少し早く引き取るべきだったわ。」

「今さらですけど。」

ふっと鼻で笑い、祖母は私達に目をやる。

はい、はい。それ聞き飽きたから。

あんななんかにもつと小さいときに引き取られてたら……、考えただけでぞつとする。

兄を見ると、面白そうに目が笑っていた。

あつ、やな予感。

「ええ、引き取られていたら、凄い人外になっていたでしょうねえ。人を人とも思わない化け物に。」

「ああ、化け物ではなく、ふさわしい子供、でしたっけ？」

「なあ、桜、俺たちは幸運だな、まだ人間だ。」

祖母がワナワナと震え、怒りのあまり声がでないようだ。

更に祖父はそんな祖母を見ておろおろする。

「若！刀自様に何という口のききよう。刀自様のお情けに……」

「ああ、刀自様、落ち着かれませ。美保、お冷茶をお持ちして！さあ！」

長年祖母に仕える神谷さんが控えるのを忘れ祖母の元に行く。

「やあ、お久しぶり、相変わらずの様子で安心したよ。」

そんな神谷さんに兄はしれ〜と声をかける。

だ・か・ら。

おかゆをゆっくり食べさせる！

私は膳の上のおかゆが食べごろを逸して、少しずつ固まりつつあるのを見た。

うん、黙っている、って私目で頼んだよね。

まして兄の膳を見れば、自分はちゃっかり完食してる。

ゴゴゴッと怒りが湧き上がる。

「お兄様、間違ってるっしやるわ。そもそも母は父が亡くなってから、子育てに問題を抱えた方よ。まずそこからご説明なさるのが筋でなくて？あの方は真正銘おばあさまの娘、ですわ。確かに、そうでしょう？」

「それに神谷さん、私達にしてください。たおばあさまの躰や思いは、兄もわたくしも決しておろそかにはしていませんよ。ええ、ほんとうに。この血肉のすみずみにまでね、沁みわたっていますもの。」

そう言って神谷さんに笑いかける。

ごめんなさい、的な雰囲気です。

勿論その眼は冷えているには違いないけど、神谷さんが息をのむのがわかった。

私はすぐその眼を気のせいだったのかと思うほど、本当にしゅん、とした感じにして、

「お許しただけませんか？兄も久しぶりの家ですもの。どう接していいかわからずに、つい憎まれ口をきいてしまっただけだと思いますから。」

そう祖母を見る。

祖母は足元もあらく部屋を出て行った。

それに続いて祖母付きの人間も出ていく。

皆が出払ったのを確かめて、あぐらをかく兄の傍にいく。

耳元で、

「あの妖怪砂掛けはあ相手に、中途半端はすんな！わずらわしい！何たくらんでるのか知らないが、私の楽しみは邪魔すんな！」

そう言って耳を引っ張ってやる。

ニヤニヤ笑う兄が、何か企んでるのはわかる。

まったく、ちゃっかり自分だけおいしく先に食べやがって！

「まあまあ、いつも通りの感じだろ、祖母と孫のコミュニケーションだ。」

「せいぜい油断してりゃあいい。」

「お前も何気にひでえ事言っただけ。」

そう言っただけで楽しそうに笑う兄。

あんたがそんな笑いをするときには、何か動く時。

「お兄様。わくわくさせて下さるのかしら？」

「ああ、まかせろ！夢と魔法の国もびっくりだ。」

「まあ。ここは魑魅魍魎の世界ですわ。間違えないでくださいませね。」

「ふっ、お札も用意しよう。」

「楽しみですわね。」

「ああ、楽しみにしてる。」

女狐がおいて行った冷茶を一人で飲みながら、二人でゆったりと微笑んだ。

第8話 仕掛け

最近何やら屋敷の中が、慌ただしい。

もちろんそれは気配として感じるもので、学校から帰り屋敷に一步足を踏み入れた瞬間、何か、そう、何か空気がざわついた後のような気配が漂っている。

この屋敷は、旧宮家別邸をそのまま移築した都内でも閑静な地区に、広い庭園と平屋の贅沢な作りになっている。

小さい時兄と泣きながら、庭の一角にある水琴窟の音色に何度慰められたことだろう。

この屋敷はいい意味でも悪い意味でも、どっしりとして泰然とした空気をいつも醸し出している。

まして、あの祖母に招かれるものなど、数も限られており、いつも屋敷の雰囲気は、まるでそれ自体動かない、時の流れと共にただ重厚にそこにあつた。

ところがここ最近、その空気が、重いそれが何かにかきまわされたような気配を帯びている。

それは、いつもこの屋敷に足を踏み入れる時、一度びしつと自分自身に対峙し活を入れ、挑む気持ちで帰る自分だからこそ、余計その空気の浮つきを感じるのだろう。

何かが起きている。

私は頭の中で兄の顔を思い浮かべ、思わず表情に出して笑うところだったけど、しっかりそれを押さえつけ、知らんふりをして、祖母に帰着の挨拶をすべく、迎いの安西さんに荷物を渡した。

茶室にいるという祖母に、やはりビンゴ！と笑うのをこらえ挨拶に向かった。

祖母は何か嫌な事があるたび、茶室にこもる。

茶室での祖母は、普段以上に陰湿になるので、飛んで火にいるバカではない私は、安西さんにすぐに茶室に祖父を呼ぶようお願いし、私を助け出すようお願いした。

代々この家に仕える安西さんは、同じように仕えてきた神谷と違って、私達兄妹の頼れる味方だ。

安西さんや他の数人のおかげで私達兄妹はこの家で生きてこられた。

あの祖母は、口々にひたすら私達兄妹をののしる癖に、肝心のその礼儀作法など、教えてはくれなかった。

触れ合うことすら忌避していたから。

それを一つ一つ教えてくれ、陰に日向に助けてくれたのが、執事長の安西さんや数人の人達だった。

それでも、母の為、兄も私も頑張った。

病院にいる母の為に。

何度も逃げ出したかったのに、病室の母を思い。

兄も私も子供だったから、母を母として慕っていた。

それが入院先が変わり、1年もたとうとした時、あの時、ああそうだった。

雨がしとしと降る寒い日だった。

兄と私が冬休みのあの日、そつと二人で父の山の写真を、日々に辛さをまぎらわせるように、大事に大事に頬を寄せ合ってみていた時、あの神谷に見つかった。

数枚しかない写真だった。

兄は私は必死でとられまいと、初めて抵抗らしい抵抗をした。

それは無駄だったけど。

あの祖母は、本当に穢わらしそうに、数枚の写真を見て、

「本当に何をこそこそと。ねえ、サト、血とは恐ろしいものね。こつしてさらけ出してしまうもの。その生まれをね。幾らこの家で過ごそうと……。ああ嫌だ、嫌だわ。おぞましい。」

そう言つて神谷の名を呼び、2人で何やら言っていたが、私はその写真がビリビリと破られるのに、泣き喚いて、兄は初めて祖母にとびかかった。

控えの人間にすぐに、取り押さえられきつく折檻を受けた次の日、私達はそつと屋敷を抜け出し、母の新しい入院先に向かった。

知恵だけはある兄が、財布を落としたと、交番にかけこみ、母の入院先のメモもなくしたと言った。

私達の服装もいかにもなものだし、あの祖母は外側だけは、金を惜しまなかった。

私立の名門の学校名も効いたらしく、その親切なおまわりさんは、病室までも調べて教えてくれた。

そして必死の思いで会いたかった母は、病院とは名ばかりの優雅な施設で好きな刺繍などをして時間を過ごしていた。

まるでサロンのようなそこで、同じような女たちが優雅にお茶を飲む姿に、はじめ倒れた時の、あの母はいなかった。

私と兄は二人でぎゅっと手をつなぎながら、ただ遠くからパテオでくつろぐ女達の中にいる母を見ていた。

案内してくれた看護師は、近づかぬ私達に怪訝な顔をし、

「ああ、病気だと思っていたのね。大丈夫よ、お母様は、ああしてゆつたりとお過ごししているの。ここは疲れた人たちが、ちよつとお休みする場所なの。」

そう言って笑った。

ちよつと疲れた？兄が私の手を更にぎゅっと握った。

そのまま私達は病院とは名ばかりのその施設を出た。

2人何もしゃべらなかつた。

ただただ見知らぬ町を二人で歩き、そして、ここで自分たち二人だけが、この世界から、はじきだされた、そう感じた。

2人でその雑踏の片隅で座って、流れる人や物を見た。

「桜、僕ね、前に帰りが遅い母さんを夜お前が寝てる時、心配で仕事先のコンビニまで見に行った時が何度も会ったんだ。」

「だけど、いつも母さんはいなくて、お兄ちゃんが、お母さんは7時に帰ったろ？っていつも言われるんだ。」

「……それでね、近くにファミレスあつたら？何度目かにそこにいる母さんを見つけたんだ。」

「母さんは本を読んで食事したり、時にはただ座ってジュースを飲んでたな。」

「僕たちもお腹すいてるのにね。」

兄は足元を見ながらぼつりと話し、

「これからどうしよつか？」

そう言った。

それから、2人とも動けず暗くなってもいる子供に、誰か通報したらしく、私達は警察に保護された。

母の為という目的を失った私達は、みるみる心身ともにやつれていった。

それに泣きながら抱きしめ祖母たちにくっついてかかっていたのが家庭教師の相良瞳という女性だった。

彼女は震えるこぶしを握り締め、祖母をなじり、私達もなじった。

頭を2人ゴンと殴られ、自分の居場所ぐらい自分で確保しろ！あんな達は子供だけど、どうやら子供じゃいられない環境だ。なあに、そういう子供だというだけだ。ならそういう子供として生きる！生きて見せる！悔しくないか、生まれてきたんだ。生きる権利がある事を忘れるな！

そんな感じの言葉を、私達は頭をぽかすか叩かれながら言われ続け、そして抱きしめられた。

生きる権利、ああ、そうだ。

私達はここにある。

その時はそこまではわからなかったが、悔しいだろう、の言葉に、これは悔しいのだと初めて自分たちが納得した。

もう上から見下げなどさせたくない、誰にも、決して。

自分でしっかり手で取れるものはとる、それでいつか……。

まあ、兄の場合、いきすぎてる気がしないでもないが。

茶室の祖母は、いつもよりきつい雰囲気だった。

私はこの祖母の顔をみれて、兄に今度優しくしてやるつか、とほくそえんだ。

「ただいま帰りました。」

そう頭を下げる私に、一言も返さず、祖母をみると唇の端が持ち上がるのが見えた。

おやおやくるぞ！私が目を下げて殊勝な態度に見えるようにいち早く身構える前に、祖父がやってきた。

ナイスだ、ふふっ、このタイミング。

案の定祖母の怒りの矛先は、まず祖父のものになった。

そして我が安西さんからの、ご友人から今度の発表についてご相談をしたいと、お電話でございます、の言葉に見事、魔の巣窟から逃げ出した。

兄が何を仕掛けたのかは知らないけど、初めてのこの不穏な空気に私はルンルンだったの言うまでもない。

第9話 詰めが甘いつて

どうやら兄は、詰めが甘いらしい。

……。

見直したと思っただらこれだ。

とことん一度話し合う必要がある。

兄の無駄に整った顔に、頭の中で釘を一本一本打ちこむさまを想像しながら、今は猫の皮を念入りに重ね、はがれおちるそばから、また、かぶり続けている最中だ。

現在進行形で。

そう、途中までは良かった。

兄はどうやら我が家の保有する古くからの株、証券をつまいこと持ち出し、その価値をうまくコントロールしつつ、祖母からの実権を自分に移行しつつあったらしい。

そこまではいい。

そこまでは。

そのままうまくいけば、すんなりと祖母をこの屋敷から叩き出してやって、物事は単純に進んだだろう。

重ね重ね残念だ。

いつも言っているように、兄は自分が懐に一度入れた人間には、本当に甘い。

この間の携帯騒動があったばかりだというのに、バカ兄はまたしても女で失敗した。

これが失敗でなく何というのか！

兄の説明を聞くに、自分のチームのメンバーの妹に頼まれ、男関係の仲裁に入ったらしいが、そこに勤めていたキャバ嬢に手をだしたら、その男だというのが出てきた。

まあ、ここまでではよくある話だ。

兄いわく、ただ買った女だ！遊びですらない！と威張っていたが。

ところが、何の因果か、その男と意気投合し遊ぶようになり、その男の兄貴分、またその上の兄貴分と、気に入られ、兄はいつの間にか、一番上の男、いわゆる会長とやらにも気に入られ、……そういうゆる暴力団のだ。

で、兄がのほほんと、のたまうには、うちのチームごと何だかその組織にはいつちまった、だそうで。

ついでに会社一つまかせられたから、と電話で言ってきた。

確かに兄は、この私からみても、全てにおいて凄い、と思える……時がある。

天才との紙一重という奴だけど。

兄をほしがる人間はそれこそ沢山いたが、こんなこういうことをし
でかす、超のつくバカとしか思えない兄も、伊達にカリスマを持っ
ているわけでなく、無理強いしてくる人間は、きちんと叩き潰して
きた。

誰もが欲しがると誰の足元にも屈しない、それが兄のスタンスだっ
たはず。

2度と誰にも屈しない、私と兄の誓いだっただはず。

それが、何もこのばばあ追い出し作戦実行中に、横道にそれるとは
……。

バカか、バカなのか、この私のいつかいつかと期待したドキドキワ
クワクはどうしてくれる。

1つに集中してるとき、おもしろいものを見つけた時の兄には、何
を言っても無駄。

株などは時間との勝負なのに。

我が家の顧問会社の連中だって、指をくわえてみているわけじゃな
い。

そう私と言えば、「あっ、それ、まかせたから。」

そう簡単に言う兄。

私はブチつと電話を切つて、着信拒否にしてやった。

それが昨夜の話し。

私だつて本当はわかつてる。

兄が本気になつたらいつでもこの家をどうにかできたのを。

けれど私が、そう私がまだ母をあきらめてないと思う兄は手を出さないでいた。

母は本当に最初の頃は頑張つて、ちゃんと頑張つてくれていた。

母と兄と私で、クスクス笑いながら、父の写真をみながら過ごしたあの日々。

やはり兄はバカだ、私は最早あの泣いていた子供ではないのに、兄は私に過保護すぎる。

けれど、だからといってこの中途半端ぶりはないよね。

そう怒つて寝た私は、そう思った私こそがバカだと知つたのは翌朝。

朝早くから屋敷に來客があつた。

三島ファイナンスの社長と重役という人間が屋敷を訪れた。

私は蚊帳の外だったが、昼過ぎに安西さんから聞かされた。

我が家は全て抵当に入り、栄光ある篠宮家は、終わったらしいことを。

私はそれを知った午後、着信拒否にしていた兄に電話を急いでかけた。

兄が屋敷にきたのは夕方だったが、兄のその強い決意を秘めた顔を見て私は何も言うのをやめた。

そうして2人、あの水琴窟の所までいき、岩の所に腰をかけて座った。

「こんなに小さかったっけ？」

私と言えば、兄は無言で煙草に火をつけた。

「あのババアが一番こたえる事は何かわかるか？」

と兄が聞いてきた。

私が答えずにいると、

「愚かな血筋の孫が馬鹿をやらかしても、あいつにやダメージにならねえ。腹でそらみると、喜ぶだけだ。だけど、またその血筋に望みをかけてもいる大バカ野郎だ。」

そう言って、あくどく色気ある顔をして獰猛に笑う。

そして、私の頭に手をやると、

「俺達、三島の養子になったぞ。やくざもやくざ、あきれられるほどの
正当派のやくざだ。」

「ばばあ、俺達が三島の養子になったと聞いて、ぶったおれたらし
い。」

そのまま、きつい笑みをはく。

「きつちり三島の説明をうけたらしいぜ。」

クククとまた笑う兄。

私は、にっこり微笑んで、兄をみて、そして、

「まあ、そのきつちり聞いてみたかったわ。」

と言った。

「俺もだ。その説明した奴、三島の専務なんだが、俺でも苦手なく
らい、あこぎなおつかねえ男だ。」

「あら、素敵な人選ね。」

私が言うと兄もまた声を出して笑う。

屋敷の抵当などで、びくともしなかったらしい祖母。

ふふっ、まさかこんな形でここから出ていくとは思わなかった。

兄が言うには、屋敷の人間、勿論私達よりの人間には充分なお金と

就職先を用意しているという。

私はこのいまいまでも愛おしい屋敷を振り返った。

さて、私はこれからどうしようか。

私一人くらせるお金は充分ある。

私だって兄に教わりながら、ちまちま小学生の時から株をしていたから。

それに時々ばかでかくあてた兄が、私にくれたお金も手つかずで残っている。

安西さんには悪いけど、保証人になってもらって、セキュリティのしっかりしたマンションでも急いで借りて、高校は公立にでも転校しよう。

私があればこれと、これからの事を楽しく考えていると、兄の目がさきほどまでの、目が覚めるようなキリリとした妹の私でさえ見惚れるものではなく、どこかうろたえているようにみえた。

私は嫌な予感がして、もう一度しっかり兄を見ていった。

「ねえ、何か隠していらっしやる？お話しして下さってもよろしいかしら？気は長い方じゃないのご存じでしょう？」

そう、コテンと首をかしげてかわいく言えば、兄はみるみる顔を青くしていく。

失礼な！でも私の事をさすがご存じね。

「うん、あの、・・・お前がいろいろ考えてる風なところ悪いんだけど・・・。」

歯切れ悪く兄は目を空に向けたまま、

「俺達、本当に、本当の養子になったんだ。うん。なった。」

私は思わず驚いて兄を見た。

何年振りかで、素で驚いた。

「何ですつてえ〜！バカ！こんの〜バカ！お前いつペン死んで来い！やくざ相手に何しくさつてんじゃあ！なるんならてめえ一人でないやがれ！ケツの毛まで綺麗にむしりとられやがれ！」

「ああ〜ん！おい、聞いてんのか！何であたしまでまきこみやがった！やつぱ今すぐ死ね！死んで来い！」

私下から見上げて、兄のTシャツの首元をつかみギリギリ締め上げていると、兄が、

「桜、桜ちゃん、ホントお兄ちゃん死んじやうから、息できないから！そんなに怒らないでえ！」

そう言つて、どんどん顔を赤くしながら両手を上げてごめんね、とアピールする。

はあ、やっぱりお前なめてんのか、私が更にギリギリとねじあげてい

ると、背後から声をかけられた。

「おやおや、勇ましいお姫様だね。」と。

そして冒頭に戻る。

私は兄の手を離し、背後を振り返った。

その男が兄の言う三島のあこぎな男、三島慎二だった。

私はにつこりとほほ笑み、

「兄妹でお話し中ですよ。ご遠慮いただいてもよろしいかしら？」

と話しかけた。

その男は器用に眉をあげ、これからは従姉妹同志なんだから気にしないで、と返してきた。

ぴきぴきとヒビが入り、猫の皮がはがれていく。

それを新たにかぶり直していく。

兄が最早意味がないんじゃない、という言葉が無視して、私はこの男、三島慎二と対峙していた。

第9話 蛇とマンゲース

私は三島慎二という、自称「従姉妹」どのに対峙した。

綺麗な英語の発音で、話し合いの邪魔をなさらぬようと、にっこり微笑んでお願いした。

すると三島慎二は器用に片眉をあげ、どうぞ日本語で、とこれまた綺麗なクイーンズイングリッシュで返してきた。

この野郎！

「あら、日本語通じましたかしら？おかしいわ。」

「ねえ、お兄様、私久しぶりに、ご成人なさっているのに、同じ母国語が通じない方にお会いして驚いておりますの。」

兄に笑顔で話しをふる、後でわかったんだらうな！との意味を込めて。

兄が青い顔で何か言おうとするのを、手でおさえ、しゃべらせない。

「勿論、お兄様も、もう一度日本語のお勉強なさるべきですわ。大好きなお兄様ですもの。心配ですわ。」

「日本語がこんなに不自由だと私、知りませんでした。アメリカなどで問題になっている外国の移民問題をリアルに日本で同じ母国語のはずなのに体験させていただくなんで。」

「それもお二人！」

それではこれで、と私はさりげなく、だが確実な嫌味を込めて可愛くため息を一つ零しつつきびすを返した。

けれどそれをまた自称従姉妹殿が阻んできた。

「ああ、お話しが理解できなかつたんですね。」

「これ以上に簡単な話しはないんですがね。」

そう言つて、こちらをみながら上品に微笑み、困りましたね、どうしましょう、みたいな人のよさそうな態度をとりつつ。

「いやあ、これ以上簡単な説明つてどうすればいいんでしょう？」

そう言つて心底困りました、という態度をとる。

十中八九、はたからみればいい人バンザイだろう。

けれど、けれど・・・、ああ、そのオプション、わざとつけてんのか！そうか！そうか、わざとか！！

その態度を裏切つて、その目はこちらを心底バカにしているのを隠そうともしやがない。

私は他人に鼻で笑われるのが大嫌い、あの祖母が唯一褒められるとしたら、うちら兄妹にそれを身を以て教えてくれたことぐらいだ。

まあいい、今は病院に運び込まれたという祖母に、心から更なるシ
ヨックを誰か与えてくれんものか、と他力本願で祈りつつ、私はく
るりと振り返り、再度、三島慎二と対峙した。

第二ラウンド、入らせて頂きます！

第十話　ゴング再び（前書き）

急に出かける事に・・・。

短いです。

第十話　ゴング再び

「ふふふふふ。」と振り返り、口元を押え上品に笑う私。

先ほどの私の兄への悪態？それ何のこと？気のせいよ、とばかりに、更にオプシオンをつけて無垢に首をかしげるおまけつきの私。

「嫌ですわ、さすがお兄様のお知り合いだけあって、無意味なご冗談をおっしゃるのね。」

無意味を強調してやる。

「ねえ、お兄様、ジョークって、その方の人となりそのまま出るとて本当ですね。とても楽しい方ね。」

私は冷たく三島を見つめ、けなしているのか褒めているのかわからない曖昧さで、けれど目では、あんたバカ？うん、バカなのね！いい歳をして、とわかるように、ふふふと綺麗に笑う。

それを三島は大人の余裕なのか、憎たらしいほどさらっと無視し、兄に向けて話しかける。

兄に向けて、だ。

「やはり、子供には大変だったみたいだな、大好きな身内が倒れて、妹さんは動転しているみたいだ。」

「まあ、うちは、基本、男所帯だけど……。」

そう言って、私を思わせぶりにみて、

「うん、問題はないみたいだな。大丈夫そうだ。」

「随分、しっかりしたお嬢さんで良かったよ。」

そう言いながら、このアバズレが、って感じで鼻で私を笑ってきた。

「ありがとうございます。人間として最低限の事は当然だと思えますもの。」

「ごく普通に生きていれば、身につく事ですけど……。褒めていただけでうれしいわ。」

私はチラッと三島を見て、その視線のみで、三島が普通ではない事をきちんとアピールしていた。

三島は、

「俺はかわいい従姉妹に期待していたんだが、いや、ほんと、イメージ通りのカワイイサで嬉しいよ。」

と、私をわざわざ何度も見て言ってきた。

「ええ、皆さんにそうお褒め頂きますの。」

私はきちんとそう答えた、どう？スルーって時と場合によっては、最高よね。

「三島さん？でしたわね。何度も言うようですが、私に新しい従

姉妹はおりませんわ。ああ、そうでしたわね、日本語が少し不自由でいらっしやるのよね。残念ですわ本当に。」

何で今さら、面倒に足を突っ込むわけ？絶対嫌だ、それこそ冗談じゃない。

厄介ごとの匂いがプンプンだ。

「お兄様、お兄様がお健やかに新しい家でお過ごしになるのを、私は反対はしませんわ。それではごきげんよう。急いでおりますの。」

そう言っつて、今度こそきびすを返す。

兄が何か言っつてきているが、今度こそ無視だ、無視。

私は屋敷の自分の部屋の荷物を片付けるべく、そこを去った。

結局、私は部屋を借りるところか、お金もおろせなかった。

どうしてって？

暗証番号がいつの間にか変えられていたからね。

それから一週間後、私は三島の家を迎え入れられていた。

お金で負けた私はとても金のかかるカワイイ養女になる事をしっか

りと決心した瞬間だった。

兄とはあれ以来一言も口は聞いていない。

大きな図体をして、本家で一目おかれるようになった兄は、私をていのいい人質に獲られるという愚を犯した。

本当に一度懐に入れた人間に甘い兄。

そうして、どこまでも私を離そうとしない、困った人。

兄は、私もだけど、自分たち以外本当は信用していない。

兄が懐に入れた人間に甘いのも絶対の自信が自分にあるから。

それに私をこうして巻き込むのも、私が大丈夫だと知っているから。

それでも当分、兄にはお灸をすえなければ。

ここは新たな敵地。

兄はピリピリしているくらいがちょうどいい。

明日は三島の護衛を連れて祖母のお見舞いに行こう。

どんな顔をするか今から楽しみだ。

思った以上にショックを受けてくれればいいんだけど。

それに、あの三島慎二には今度遊んでもらおうか。

覚悟しておいてね。

私は自分が甘くみられるのがこんなに嫌いだとは知らなかった。

私は新しい居住先である本家の庭の東屋でお茶を飲みながら、上品に甘く夢見るように微笑んだ。

第11話 新しい日々

新しい家は、規模も別段、前の屋敷とはさほど変わらないが、出入りする人間の数は格段に増えた。

それもヤのつく人ばかり。

兄はすでにここの仕事についていて、このままいけば、おめでとう！次期後継者って感じ。

それなりにチームの時から顔は知られているらしく、私は知らなかったがときたま仕事の依頼も受けていたらしい。

兄はいい、兄は。

問題は私の立ち位置だ。

新しい義父は、「えっ？義父って無理があるんじゃない？」というくらいのナイスミドルの方だった。

50をいくばくか超えたこの人は、結婚はしなかったらしい。

認知した子はあるまるといえるらしいが、一切かわりを持たず、お金で解決してきたらしい。

らしい、ばかりの困ったさんだ。

本人いわく、「碌な子供がない。」だそうだ。

それは反対に碌な女と付き合ってたと言っているようなもの。

私が白い目で見てやると、若頭とか若頭補佐とかいう、普通の会社で言えば役付きの人達に、

「かわいい義娘に馬鹿にされた。」と泣きついた。

あほらし、貴方がどう言おうと、私は兄の枷としてここにいる。

私に目をつけた事をたっぷり後悔させてあげる。

私は義父、三島高志とここに引越してから2週間目にこうして面会した。

私が奥ノ院といわれる離れの自分の部屋で本を読んでいると、日付も大幅に変わった頃、酒臭い息をさせながらアホ兄がやってきた。

「お兄ちゃんが帰ってきたよ。」

そう言いながら私の背中にガバリと張り付いてくる。

まだ口をきいてあげない私に、

「お兄ちゃんとおしゃべりしよ〜よ。」

「ちびっころよ〜。」

と、泣き言を私の耳元で言ってくる。

兄の世話役になった30がらみの若宮さんに目配せをして、「いいです。」と伝えた。

若宮さんは、きっちり私達に礼をすると、他の数人を連れて出て行った。

兄と会うのも1週間ぶりか。

私は兄に目で問うた。

「どづいつつもり?」と。

兄は私を更に背中からきつく抱きしめると、

「俺たちにふさわしい場所だ。」

そう少しも酔っていない低く冷たい声で私の耳元で答える。

兄と私は目を合わせた。

「お兄ちゃんは酔ってないぞ。」

そう騒ぐ兄に、

「しょうがないわね。お酒を召すのもたいがいになさいます。」

そう言っつて私は兄を私のベッドに寝かしつけた。

備え付けの冷蔵庫からミネラルウォーターを出して、だらしなくシヤツをはだけた兄に飲ませる。

二人目があつて笑いあつたが、お互いそれは笑みとは程遠い獰猛なものだった。

確かに、あの屋敷ではいずれ限界がくる。

自慢ではないが兄はそういう人間で、私はその兄のたった一人の魂の血族。

兄が飛び立つのを邪魔していたのは私。

心のどこかで、もはや失われた家族の幻を見ていたがったのは私だから。

本当はずっと私の傍にいたかった兄が、小学校の高学年から家に寄り付かなくなったのは、夢をみていたかった私の為。

私は明かりを消して、兄が眠るベットに入る。

ベッドにいる兄は、私を抱き寄せじつと、じつと私を見つめる。

私も兄を見つめ続ける。

お互い輪郭もおぼろげながら、二人ぴつたりと寄り添って、久しぶりに一緒に眠った。

第12話 変化

あれから兄は、本性バリバリにつきすすんでいる。

それまでが惰眠をむさぼる大型犬だとすれば、現在は疾走する獅子。より冷酷に残忍に事にあたり、一部の隙を見せた相手には余すことなく徹底的にむさぼり食らいつくし、本当に骨の欠片も残さず、の仕事ぶりらしい。

これは兄付きの若宮さんが思わず私に感嘆を込めて言うんだから間違いないだろう。

長年のそういう稼業の人に驚かれ惚れられる仕事ぶりってどうなのよ、とは思っけど、私に降りかかる火の粉じゃないし、何の関心もない。

まったく本来の美丈夫ぶりに、カリスマ全開なんだから、私にとって迷惑極まりない。

私はあまりに兄がやる気満々なので、当初はここをひっかきまわすつもりでいたけれど、何か力が抜けたというべきか、今度は私が惰眠をむさぼらせていただいている。

それはもう縁側の猫状態だ。

本当にこちら兄妹はあまのじゃく極まれりだと思う。

祖母の家にいる時は、私が優美な生き物として疾走し、ここの家で

は反対に兄が疾走している。

そんな以前の私を知っているものが見れば、信じられないくらいに、だるだるの状態の私を兄は満足そうに見ている。

兄いわく、今の状態の私の方が、非常に蠱惑的で危ない、この家にいて自分に愛でられている！だ、そうだ。

そんなセリフを聞いたなら、いつもなら鼻で笑って幻の尻尾でその顔をひっぱたいてやるんだけど、自分でも重傷なくらい、なぐんもやる気が出ない。

私ってマゾ？Mっ気なんて欠片も持ち合わせてないと思っていただけ、あの祖母と離れて以来、いまいち本調子が出ない。

愛情？そんな上等なものは持ちあわせていない、それは欠片ほども。

私は、あの血だけに縛られている愚かな家を出てから初めて祖母の顔をみようと見舞いに出かけることにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4954u/>

たゆとう

2011年10月7日12時44分発行